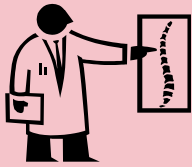


伊藤外科ニュース



79号

2010.12 発行



冬の足音

遅れていた新宿中央公園の紅葉が見事になってきました。また、木枯らしも吹き始めいよいよ冬到来の予感がするこの頃です。

今週は父彬男と義父の墓参りに行ってきました。父の墓は高円寺にあります。父が故郷の千葉から移したものです。質素で小さなお寺ですが、とても気に入っています。墓参した時は思いがけない紅葉の素晴らしさに感激しました。

一方、義父の墓は三浦半島の先端の三崎にあります。山の斜面にあり海が一望できるので、義父は気に入ったそうです。墓参の日は温かく、幸運にも海にかかる虹を見ました。

実は、私が墓参りに行くことは御先祖のためだけでなく、自分自身の心の平和のためと感じています。私は、決して信心深い人間ではありませんが、神社仏閣の前を素通りできません。ついつい拜んでしまう気持ちが多く生死を観て自分の中に育ってきたのだと思います。もっとも、友人にこの話をすると、「年を取ったんだよ。」と言われるのですが。

胆石症のお話



さて、今回は胆石症について少し書きたいと思います。胆石の多くは胆嚢内にできます。胆嚢は肝臓で作られる消化液である胆汁のタンクの役目をしています。胆汁の成分が濃厚に成り過ぎたり、胆嚢の働きが低下したり様々な要因で結石ができます。

伊藤外科には、人間ドックでお腹の超音波検査をした結果、胆石症と診断され、今後どうすればよいかと相談にみえる患者さんがいらっしやいます。痛みや黄疸を伴わない(無症候性胆石症)患者さんには、胆嚢がんが合併していない事を確認したうえで、手術をせず経過観察を勧めています。

しかし、胆嚢の中に石が充満し胆嚢がその働きをしていない場合には、手術を勧める場合があります。胆嚢結石があると、頻度は不明(1~2%)ですが、胆嚢炎を起こします(胆嚢炎の患者さんの90%に結石があります)。胃の辺りから右側にかける強い痛みと発熱が多くの場合認められます。胆嚢炎が重症な場合には入院し、絶食抗生剤の点滴などの内科的治療や、緊急手術が必要となります。

そこで、結石の症状は一度でも出現した場合には、年齢や持病を考慮して手術を勧めることもあります。腹腔鏡による胆嚢手術は技術も確立し、安全に行える手術と考えます。

最後に自分自身への戒めを含めて、年末年始は食べ過ぎと運動不足になりがちですので、体重と健康管理に気を付けましょう。ショートケーキ1個は390キロカロリーで、体重60キロの人間が速歩20分で消費するエネルギー60キロカロリーの6倍以上です。また、冬の果物の代表であるリンゴ一個とご飯一膳は同じカロリーです。

健康で年末をお過ごしください。



今回の一冊

祖母・齋藤輝子の生き方

猛女と呼ばれた淑女

齋藤由香 著

「齋藤輝子」、この名前を知っているのは、40代、いや、50代以上の方だろうか。大正から昭和初期の短歌結社誌「アララキ」の中心人物にして精神科医・齋藤茂吉の妻。そして、作家にして同じく精神科医の齋藤茂太、北杜夫の母である。この家族構成だけでもたいへんなものだが、実はもっとタイヘンだったのが、輝子さん自身なのである。

本書の著者は、北杜夫の長女、つまり輝子さんの孫である。会社務めをしながらエッセイストとして週刊新潮で『窓際OL トホホな朝ウフフの夜』を連載しているので、ご存知の方もいると思う。家族の歴史をひも解くように、著者が生まれる前の茂吉・輝子夫婦のことを描き、孫として時をともにした晩年の輝子の姿を、宝石箱のなかの宝物を愛でるように綴っている。

輝子さんは明治28年生まれ。東京一の規模ともうたわれる開業医の娘として生まれ、13歳年上だった茂吉は輝子さんの実家である「齋藤家」に婿養子に入った。

大病院の娘として乳母日傘で育った輝子さんだったが、これが「腹の据わった行動派」とでもいおうか、若い頃にも破天荒な話がいくつもある。大正13年には留学中の茂吉追いかけて、ひとり船に乗り込んでヨーロッパ旅行へ。戦前には「ダンスホール事件」（不良ダンス教師による有閑マダム相手の醜行）にまきこまれ、新聞紙上で正々堂々と弁明したり。

戦争による大病院の消失、復興、大家族を抱えての筆舌に尽くしがたい苦勞。そうしたもろもろを「弱音をはかない・めげない・こびない」で乗り越えた輝子さんは、茂吉の死後、昭和35年から取り憑かれたように海外に出かけて行く。それもなまじな観光旅行ではない。79歳で南極に立ち、80歳でエベレスト山麓へ、85歳でジンバブエ。ワタクシも一度、テレビ番組『徹子の部屋』で旅の話をする輝子さんの姿を拝見したことがあるが、小さな品のあるおばあさまなのに、声には芯が一本通った力強さがあったのが印象的だった。

著者は本書の最後のほうで、こう書いている。

「それにしても、『齋藤家の人々』は何と強烈で個性的だったのだろう。茂吉や輝子のスケールの大きさに圧倒される。孫世代の私は何故こんなにも小粒な人間になってしまったのだろうか」

小粒になったのはもちろん著者だけでなく、いまの日本人のほとんどが右に同じ。嗚呼、日本人はいま再び、「明治人」の気骨とスケールを取り戻すことができるのだろうか……。 (一弓)